

ブロックチェーン米国市場調査 報告書

この報告書について

この報告書は、ブロックチェーン技術の最新動向として、特に以下の**2**つにフォーカスして調査をおこなったものである。

- ブロックチェーンの有力な応用先として考えられている**IoT**分野について、特に**IoT**に特化したプロジェクトである**IOTA**の動向を中心とした現状の調査結果
- **ISO TC307**などの国際標準化、日本国内の動向、および国際会議における新規技術開発の方向性

本報告書の内容は、**2019年3月20日**時点のものであり、その後の動向については反映されていないことに注意が必要である。

IOTAについての調査

IOTAプロジェクトの概要（1p）

ブロックチェーンは、支払いや決済をはじめとして、様々なトランザクションを実行する基盤として注目を集めている。様々なアプリケーションが検討されている中で、**IoT（Internet of Things）**は、有力なユースケースの**1**つと考えられている。その理由は、分散した**IoT**デバイス間で発生するトランザクションの基盤として有効と考えらること、**IoT**アプリケーションにおける課金では、マイクロペイメントが多用される可能性が高いため、マイクロペイメントの処理を行う基盤としてブロックチェーン上の通貨やトークンが有効あると考えられているためである。

IOTAは、そのような**IoT**用途にフォーカスを当てた、マイクロトランザクションとデータの非改ざんを目的とした分散型台帳プラットフォームである。**IOTA**が解決しようとしている課題は、主には**Bitcoin**などのブロックチェーン技術がもつスケーラビリティ問題である。（パブリック）ブロックチェーンでは、分散合意を含めたセキュリティを保ちながらブロックサイズを大きくすることは困難であり、ビットコインの現在の仕様では、**Layer2**技術を使わない場合、系全体で、**1秒あたり7トランザクション**程度しか処理することができない。**IOTA**ではこの問題を解決する技術的手段として、後述する**DAG（有向非巡回グラフ）**を用いている。**IOTA**ではこれを**Tangle**と呼んでいる。

IOTAは、**Tangle**を使うことの効用として、以下の点を挙げている。

- スケーラビリティの向上

- 省リソースデバイスでも実行可能であること
- トランザクション手数料が0であること
- データに関するセキュアな送信
- オフライン処理の許容
- 耐量子計算機

以上については、次節以降において概要と現時点で明らかになっている評価を示す。

IOTAに関する活動、プロダクトの開発は、IOTA財団が主体となっており行なっている（IOTAの開発自身はオープンソース）。IOTA財団は、2017年にドイツで正式に登録された非営利組織（NPO）である。IOTAは、IOTAトークンを発行し、いわゆるICO（Initial Coin Offering）によって、2015年の11月と12月に、\$500,000相当の暗号通貨建てで資金調達を行なっている。IOTA財団によると、このトークンについて設立者やデベロッパーには特別な配分はなされていないとする。そのほかに、政府からのグラントや寄付などを収入源とするとしている。この報告書の執筆時点でのマーケットキャップは、\$775,556,954である（約850億円相当）である。また、IOTAにはBoschが出資をしている。

IOTAプロトコルの概要（2p）

本節では、IOTAプロトコルの概要を述べる。

IOTAで用いられているDAG（有向非巡回グラフ）

- Tangle (DAG)
- Curl Hash function
- Current status of security evaluation on Tangle and DAG
- evaluation of concept (if hash is good)

IOTAプロジェクトについて指摘された問題点と対応経緯（2p）

- Attack on Curl
- Real attack demo
- Timeline
- Responsible Disclosure

IOTA財団の対応における組織的な問題点（2p）

- Summary from tangle blog
<http://www.tangleblog.com/wp-content/uploads/2018/02/letters.pdf>
- <https://thebitcoinnews.com/mit-criticizes-iota-gaping-hole-in-its-software-and-deceptive->

marketing/

- <https://blog.iota.org/official-iota-foundation-response-to-the-digital-currency-initiative-at-the-mit-media-lab-part-1-72434583a2>

IOTAプロジェクトの新たな攻撃募集（1p）

- Call for attack to Troika
<http://blog.iota.org/678e741315e8>
<http://blog.iota.org/615d2d79001>

IOTAプロジェクトの現状（1p）

プロダクトの現状

R&Dロードマップ

IOTAは、研究開発のロードマップとして以下の7つの項目を示している。

- **Coordicide:** IOTAにおける合意アルゴリズムの脅威分析、数学的なモデル化、シミュレーション、および形式化を行う。
- **Spam prevention and detection:** IOTAのDAGのネットワークに参加するデバイスの中から、以上なデバイスを取り除く技術の研究。
- **Automatic peer discovery:** DAGのネットワークに参加するデバイス（Peer）の自動発見を行うプロトコルの開発。
- **Economic Incentives:** より現実的なゲーム理論的な解析を行い、IOTAのインセンティブモデルと、ナッシュ均衡であるかどうかの研究。将来Tangleが広く普及し、スケールした際にもインセンティブモデルが正当に働くかどうかの検証する。
- **Consensus Algorithm spec:** IOTAの合意アルゴリズムについて、その詳細スペックを策定し、ピアレビューに掛ける。
- **Cryptography spec:** IOTAで使われている暗号プリミティブの研究。ハッシュ関数と電子署名、および脅威モデル。その成果を将来のピアレビューに掛ける。
- **Attack analysis:** 合意アルゴリズムに対する攻撃の可能性の研究。

上記の研究開発テーマのリストからわかることは、IOTAの基本的なアルゴリズムでさえ、一定程度の検証を経たものがなく、安全性の検証という観点ではほぼ何もない状態でプロダクトの開発が行われていると考えた方が良い。これは前述の脆弱性の対応が不十分にできていない経緯と符合するものである。現状、ブロックチェーンや分散型台帳技術について、安全性証明を行うフレームワークは存在せず、また数年以内に一定の理解を得たフレームワークを作ることが難しいことを考えると、さらに解析が複雑、かつ異常系への対応などが不明なIOTAについて、5年から10年の単位で、実際のビジネスに展開するのは難しいと考えられる。

Alternative for IOT（1p）

- スケーラビリティ 機器数
- サプライチェーン
- トレーサビリティ
- Single Point

標準化および研究開発動向 (5p)

ISO TC307の現状（3p）

ISO TC307は、ISOにおいてブロックチェーンおよびDLT(分散台帳技術)の標準化を行う技術委員会であり、2017年の4月にシドニーで第1回目の国際会議が開催されて以来、東京（2017年11月）、ロンドン（2018年5月）、モスクワ（2018年11月）と計4回開催されている。現在、TC307の組織は以下のように構成されている。

- WG1: Foundations
- WG2: Security, privacy and identity
- WG3: Smart contracts and their applications
- JWG4: Joint ISO/TC 307 - ISO/IEC JTC 1/SC 27 WG: Blockchain and distributed ledger technologies and IT Security techniques
- WG5: Governance
- SG2: Use Cases
- SG7: Interoperability of blockchain and distributed ledger technology systems

標準化文書の現状

今後の予定

TC307の将来の国際会議は以下のように予定されている。

- 2019年5月27日-31日：Dublin (Ireland)
- 2019年11月18日-22日：Visakhapatnam (India)

日本国内での取り組み（1p）

CGTF (Cryptoasset Governance Task Force)

コインチェックによる暗号資産の流出事件が2018年1月に発生したことを契機に、仮想通貨交換取引所のセキュリティ確保とガバナンスの確立が急務となった。これを受けて、日本のセ

セキュリティ専門家と一部のブロックチェーン事業者の有志で、任意団体**VCGTF**（**Virtual Currency Governance Task Force**）が設立された。その後、金融庁の「仮想通貨交換業等に関する研究会」において、仮想通貨の代わりに暗号通貨という新しい呼称を用いる方針となったため、この任意団体の名称は**CGTF**（**Cryptoasset Governance Task Force**）に変更となった。金融庁は、仮想通貨交換取引所について、業界団体などによる自主規制を行う方針を取っている。一方で、仮想通貨交換取引所、およびブロックチェーン事業者としての業界団体が複数設立され、自主規制団体としてまとまった意思決定や行動ができる状態になっておらず、公式な自主規制の方針や基準ができないまま、コインチェックによる事件が発生した。公式な自主規制団体の設立と自主規制基準の作成が遅れたことが、仮想通貨交換取引所におけるインシデントの発生の可能性を高めたとも言える。

そのため、**VCGTF**が設立された当初は自主規制団体が存在しなかったが、将来、自主規制団体が設立されることを想定して、自主規制団体におけるセキュリティの基準として参照される文書を作成すること、必要によっては金融庁などに直接参照される文書を作成することが**CGTF**の目標である。

CGTFでは、主に仮想通貨交換取引所が、**ISMS**（**ISO/IEC 27000**シリーズ）に準拠したセキュリティマネジメントプロセスを実施することができるよう、同標準に基づいたセキュリティ確保のためのプラクティスを記述した文書を作成している。その他に、暗号資産に関わる用語の定義を行う文書、ブロックチェーンシステムで使用しているウォレットに関する調査報告書を作成している。

仮想通貨交換所のセキュリティ対策についての考え方

この文書は、仮想通貨交換取引所のセキュリティマネジメントについて、**ISO/IEC 27002**で規定されたフォーマットに従い、仮想通貨交換所システムのリスク分析を行い、セキュリティ対策のプラクティスをまとめている。現状、仮想通貨交換所のシステムについては、共通のアーキテクチャなどは存在せず、各事業者が自己流でシステムの設計、構築、運用を行なっている。そのため、この文書の作成に当たっては、可能な限りのブロックチェーン事業者からヒアリングを行い、システムのモデル化を行なった上で検討している。そのため、その他の仮想通貨交換所のシステムのセキュリティをカバーするためには、追加のヒアリング等が必要である。

この文書は、**IETF**の**Internet Draft**（**I-D**）として公開されている。またこの文書は、**ISO TR23576**（**Security management of Digital Asset Custodians**）にも入力されている。

- [IETF] General Security Considerations for Cryptoassets Custodians, <https://datatracker.ietf.org/doc/draft-vcgtf-crypto-assets-security-considerations/>
- [ISO TR23576] Blockchain and distributed ledger technologies -- Security management of digital asset custodians, <https://www.iso.org/standard/76072.html>

Terminology for Cryptoassets

この文書は、仮想通貨（暗号資産）の技術文書を作成するにあたり、必要な用語の定義を行うために作られている。

この文書は、IETFのInternet Draft（I-D）として公開されている。

- [IETF] Terminology for Cryptoassets, <https://tools.ietf.org/html/draft-nakajima-crypto-asset-terminology-01>

日本国内における仮想通貨ウォレットの実態調査

この文書は、金融庁の「仮想通貨交換業等に関する研究会」において、新たにカストディとウォレットのセキュリティに関する規制が検討されていることから、秘密鍵を管理するウォレットとカストディ機能について、現状の事業者がサービスとして提供しているものの実態を調査した報告書である。

CGTFの詳細について、<https://vcgtf.github.io> から参照することができる。

- Relationship to JVCEA

その他の動向（1p）

標準化団体

ITU-T

ITU-Tでは、引き続き

IETF

W3C

学術会議

Financial Cryptography 2019

Financial Cryptography 2019は、2019年2月18日から22日まで、St. Kittsで開催された。昨年までは、併設のワークショップとしてBitcoin Workshopが開催されていたが、本年はこのワークショップをFinancial Cryptographyにマージする形となった。投稿本数が178本に対して採録が39本であり、採択率は21.9%と昨年の23.6%より少し減少した。昨年までとの大きな違いは、Bitcoin Workshopをマージしたことで、採録本数がほぼ倍増したことである。それでも採択率が変わらないということは、投稿本数も倍増に近かったことを意味している。なお、非公式ではあるが、投稿論文のほぼ半数がブロックチェーンに関連する論文という話があり、ブロックチェーンに関する学術研究が、Financial Cryptographyへの投稿に値するレベルで結果

が出始めていると考えられる。

ブロックチェーンに関するセッションと論文は以下の通りである。

Session 2: Cryptocurrency Cryptanalysis

Session Chair: Ian Goldberg

Biased Nonce Sense: Lattice Attacks against Weak ECDSA Signatures in Cryptocurrencies.

Joachim Breitner (DFINITY Foundation) and Nadia Heninger (University of California, San Diego)

Session 3: Proofs of Stake

Session Chair: Jens Grossklags

Snow White: Robustly Reconfigurable Consensus and Applications to Provably Secure Proofs of Stake. Phil Daian, Rafael Pass (CornellTech), and Elaine Shi (Cornell)

Compounding of Wealth in Proof-of-Stake Cryptocurrencies. Giulia Fanti (CMU), Leonid Kogan (MIT), Sewoong Oh (UIUC), Kathleen Ruan (CMU), Pramod Viswanath, and Gerui Wang (UIUC)

Short Paper: I Can't Believe It's Not Stake! Resource Exhaustion Attacks on PoS. Sanket Kanjalkar, Joseph Kuo, Yunqi Li, and Andrew Miller (UIUC)

Session 4: Measurement

Session Chair: Patrick McCorry

Short Paper: An Exploration of Code Diversity in the Cryptocurrency Landscape. Pierre Reibel, Haaron Yousaf, and Sarah Meiklejohn (University College London)

Short Paper: An Empirical Analysis of Blockchain Forks in Bitcoin. Till Neudecker and Hannes Hartenstein (Karlsruhe Institute of Technology)

Detecting Token Systems on Ethereum. Michael Fröwis (University of Innsbruck), Andreas Fuchs (University of Münster), and Rainer Böhme (University of Innsbruck)

Measuring Ethereum-based ERC20 Token Networks. Friedhelm Victor and Bianca Katharina Lüders (Technische Universität Berlin)

Session 5: Traceability and How to Stop It

Session Chair: Rainer Böhme

New Empirical Traceability Analysis of CryptoNote-Style Blockchains. Zuoxia Yu, Man Ho Au (Department of Computing, The Hong Kong Polytechnic University), Jiangshan Yu (Monash University), Rupeng Yang (School of Computer Science and Technology, Shandong University and Department of Computing, The Hong Kong Polytechnic University), Qiuliang Xu (School of Computer Science and Technology, Shandong University), and Wang Fat Lau (Department of Computing, The Hong Kong Polytechnic University)

Short Paper: An Empirical Analysis of Monero Cross-Chain Traceability. Abraham Hinteregger and Bernhard Haslhofer (Austrian Institute of Technology)

PRCash: Fast, Private and Regulated Transactions for Digital Currencies. Karl Wüst, Kari Kostiaainen (ETH Zurich), Vedran Capkun (HEC Paris), and Srdjan Capkun (ETH Zurich)

ZLiTE: Zcash Lightweight Clients using Trusted Execution. Karl Wüst, Sinisa Matetic, Moritz Schneider (ETH Zurich), Ian Miers (Cornell Tech), Kari Kostiaainen, and Srdjan Capkun (ETH Zurich)

Session 9: Getting Formal

Session Chair: Gaby Dagher

Minimizing Trust in Hardware Wallets with Two Factor Signatures. Antonio Marcedone, Rafael Pass (Cornell University), and abhi shelat (Northeastern University)

A Formal Treatment of Hardware Wallets. Myrto Arapinis, Andriana Gkaniatsou (University of Edinburgh), Dimitris Karakostas, and Aggelos Kiayias (University of Edinburgh and IOHK)

VeriSolid: Correct-by-Design Smart Contracts for Ethereum. Anastasia Mavridou (NASA Ames), Aron Laszka (University of Houston), Emmanouela Stachtari (Aristotle University of Thessaloniki), and Abhishek Dubey (Vanderbilt University)

Bitcoin Security under Temporary Dishonest Majority. Georgia Avarikioti, Lukas Kappeli, Yuyi Wang, and Roger Wattenhofer (ETH Zurich)

Session 10: Off-Chain Mechanisms and More Measurement

Session Chair: Sven Dietrich

VAPOR: a Value-Centric Blockchain that is Scale-out, Decentralized, and Flexible by Design. Zhijie Ren and Zekeriya Erkin (Delft University of Technology)

Sprites and State Channels: Payment Networks that Go Faster than Lightning. Andrew Miller (UIUC), Iddo Bentov (Cornell Tech), Surya Bakshi (UIUC), Ranjit Kumaresan (Visa Research), and Patrick McCorry (King's College London)

Echoes of the Past: Recovering Blockchain Metrics From Merged Mining. Nicholas Stifter (TU Wien), Philipp Schindler, Aljosha Judmayer (SBA Research), Alexei Zamyatin (Imperial College London), Andreas Kern (SBA Research), and Edgar Weippl (TU Wien)

TxProbe: Discovering Bitcoin's Network Topology Using Orphan Transactions. Sergi Delgado-Segura (UAB), Surya Bakshi (UIUC), Cristina Pérez-Solà (Universitat Rovira i Virgili), James Litton, Andrew Pachulski (UMD), Andrew Miller (UIUC), and Bobby Bhattacharjee (UMD)

また、2月22日に行われた併設ワークショップでは、ブロックチェーンに関するものは2つ行

われ、1つは例年と同じくスマートコントラクトを取り扱う**3rd Workshop on Trusted Smart Contracts**、もう1つは、暗号通貨の実装に関する新提案を発表する**1st Cryptocurrency Implementers' Workshop**である。

会議用の予稿は会議の[Webページ](#)からダウンロード可能である。

Scaling Bitcoin

Scaling Bitcoinは、**2015**年に、主にブロックチェーンのスケーラビリティ向上のための技術について、利害関係を排除し、純粋に技術的な議論をエンジニアとアカデミアが協力して行う会議としてスタートした。**2018**年は、慶應大学と東京大学を中心に**BASE**アライアンスがアカデミックホストとなる形で、**2018年10月6日、7日**に行われた。**2018**年から、よりアカデミックに近い形での査読プロセスが導入され、エンジニアコミュニティから**10**人、アカデミアから**10**人から構成されるプログラム委員会により、採録が決定された。発表申し込み**39**に対して採録**19**で、採択率はほぼ**50%**である。

特に注目を浴びた発表は以下の通りである。

Scaling Bitcoin 2018の発表スライドとビデオは、[Scaling BitcoinのWebページ](#)から参照することができる。